学 生 時 代 の 思 い 出 (※1)

高普第５回卒 (※2)　中川　定光 (※3)

おもえば月日のたつのは早いものです。白線の学帽をかぶり希望に燃えながら校門をくぐったのもつい先日のごとく感じられます。

からたちの生垣に囲まれた校舎、由緒ある伝統深き学校、そしてまた当時は旧制中学校から来た上級生がおり校風にもそのおもかげがありました。入学当時早々からの上級生の強烈なる歓迎、新制中学校を出て来た私達には驚きの前に自分は高校生になったのだという意識がジーンと胸にきました。別棟になっている各校舎をつないでいる中央廊下の大きなこと、階段のある教室、そして各教室には番号がついている。見るもの聞くものがすべて真新しいものばかりでした。担任の岡田先生 (※4) に案内された私の教室は 16 番教室です。今もって忘れないのはこの 16 番教室と 13 番教室の二ツです。13 番教室とは上級生にしごかれる教室です。

学生時代の印象として残るのはなんといってもクラブ活動ではないでしょうか。私の場合大学に入るための一段階として入学したはずの高等学校でしたが、いつしかスポーツに熱中してしまいました。２年生のとき全国選抜高校相撲大会に出場し１回戦で負けたのがくやしくて毎日練習せずにはいられなくなりました。ある先生が心配してくれて、勉強とスポーツは両立しないからスポーツをやめるようにということだったが、当時柔道部の主将をしていた長谷川健二 (※5) 君と勉強とスポーツを両立させようと誓いあっていたのでやめませんでした。

今になって想えば学生時代とは身心とも発展途上にあり、努力をすればするほど発達するものだと思います。青春とは無限の能力を秘めているもの、まっしぐらに突走る時代だと思います。在学生諸君はちょうどその時期です。ものにおくせず先生の善導のもと大いにハッスルして下さい。先生方はそれを喜ぶとも苦にはしないはずです。人間は自分の限界を知った時後をふりむきたくなるものです。私はまだ 40 才を少しすぎたばかりなのに、時々学生時代の想い出にふけっている自分に気づきハッとする時があります。地域社会の後進性を脱却すべく努力している相馬市の職員としてはずかしくなります。

文化施設も体育施設もまだまだの相馬市、昔はあった野球場、相撲場もなくなってしまった相馬高等学校、西山の溜池を水泳部の練習場にしていた相馬高等学校、これらいくたの問題は今後の我々に課せられた懸案です。ともにあいたずさえ、協力しあって、豊かで住みよい、調和のとれた郷土の建設、母校の発展のために努力しようではありませんか。

(※１）記念誌『相中相高八十年』〈1978（昭和 53）年５月発行〉の「想い出の記」より。

(※２）全日制普通科では、この第５回卒から、現在と同様、相馬高等学校に入学、修業年限３年での卒業となった。
また、第５回（昭和 28）卒から第９回（昭和 32）卒までの５年間、普通科が男女共学となり，毎年女性数名が在籍している。

(※３）昭和 28（1953）年卒、鹿島出身。

(※４）岡田正一（「相中相高百年史」資料編：学級担任一覧による)。 相中第 36 回、昭和 13（1938）年卒、中村出身。

(※５）相高普第５回、昭和 28（1953）年卒、中村出身。

（ 転記&※脚注　村山 ）